

氏名・(本籍地)	大塚 伸 夫 (千葉県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第81号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	インド初期密教成立過程の研究
論文審査委員	主査 高橋 尚 夫 副査 津田 真 一 副査 小峰 彌 彦 副査 苦米地 誠 一

大塚 伸 夫氏 学位請求論文審査報告書

「インド初期密教成立過程の研究」

論文の内容の要旨

本研究は、インドにおいて仏教の一形態として現れた密教を、初期・中期・後期と区分したうち、とくに初期の密教(3世紀～7世紀中葉ころまでの時代)が、どのような背景のもとに形成され、展開し、確立していったかという成立過程を中心に考究したものである。

本論は、序論・三篇の論考・結論から構成される。

序論では、先行研究を踏まえて、新たな研究の方法論を提示している。それは、四世紀半にも及ぶ初期密教の時代を一つの時代として一律に捉えるのではなく、さらに第一期(3世紀～5世紀中葉)・第二期(5世紀中葉～6世紀中葉)・第三期(6世紀～7世紀中葉)に分割する方法を導入した点である。これによって各時代ごとに制作された諸経典を整理し、各時代ごとに密教の形態を明らかにし、初期密教の形態が変化していく様相を明らかにしようとする。またこの作業結果を以て、初期密教の成立過程を究明しようとするものである。

第一篇では、初期密教時代における第一期に焦点をあて、この時代に制作された諸経典よりうかがえる小乗・大乘・ヒンドゥー教などの諸要素を浮き彫りにし、第一期の初期密教の成立形成について論じている。この時代の密教は、大乘の般若思想や陀羅尼思想を背景に展開した〈密教系陀羅尼経典〉群と、『阿含経』(小乗)のパリッタや律典を背景に摂取・改変しながら制作された〈密教系護呪経典〉群との二潮流のもとに、三段階にわたって形成されたものと見做している。第一段階は、第一期の序盤であり最初期密教の時代であるが、この最初期密教は、インド古来の呪術信仰や呪文信仰にそったダラニや呪文をもって、守護や息災などの安寧を得ようとしたものであり、非仏教的なインド古来の呪術信仰や呪文信仰に根ざした守護を目的とする密教であるとする。第二段階は供養法を組織した念誦法と顕著なヒンドゥー教的呪文に彩られた密教となり、第一期終盤の第三段階では、供養法を組織した念誦法に、初めてマンダラが登場して儀軌化をとげる点を指摘する。

第二篇は、新たに展開する第二期時代の密教形態について論じている。第二期は、第一期時代より継続する〈密教系陀羅尼經典〉群と〈密教系護呪經典〉群による密教形成の流れを受けているが、画像・仏像・マンダラを本尊にして儀軌を組織した經典が大勢をしめ、第二期時代の新たな動勢が、マンダラや画像といったある種の本尊を想定した組織的な儀軌の構築にあったことを明らかにしている。中でも『牟梨曼陀羅呪經』が、初期密教における重要な転換点であったことを明らかにしている。

第三篇では、第三期時代に確立していく初期密教の諸形態を〈フリダヤ系〉〈護呪系〉〈観音系〉〈仏頂系〉〈禁戒系〉〈灌頂系〉のグループ別に論じている。そして、この時代の密教は、多様化→規範化→大乘の思想化といった三段階に展開する様相を呈して、確立していったと論じている。

最後に、結論として三期全体を通じて、どのように初期密教が形成し、展開して確立されていったかを通観している。

以上のように本研究は、先行研究の成果を十分に踏まえながらも、新たな時代区分法を導入し、これまで不明瞭であった初期密教の成立過程について、時代ごとに克明に究明されているといえよう。

審査結果の要旨

従来、インド密教に関する分類法は、チベットにおける分類法に従った、所作・行・瑜伽・無上瑜伽のタントラ四分類法と、日本の真言・天台の伝統宗学における雑密・純密の区分を時代区分に応用した、初期・中期・後期密教に分類する方法であった。この場合、雑密が初期密教に、純密が中期密教に、無上瑜伽タントラが後期密教に当てられる。これまでの密教研究は、欧米では後期密教を中心とし、日本では伝統宗学に批判的な立場から漢訳密教經典全般を扱った大村西崖『密教発達史』はあるものの、梅尾祥雲『秘密仏教史』、松長有慶氏『密教の歴史』『密教經典成立史論』、頼富本宏『密教仏の研究』などによって、梵蔵漢にわたる幅広い研究がなされ、飛躍的にインド密教に対する研究成果が蓄積されてきたが、日本密教（真言宗・天台宗）の所依の經である『大日經』『金剛頂經』などの中期密教を中心としており、初期密教についての研究は少なかった。また従来の初期密教研究では、特徴の有る經典に着目して、そこにおける經典ごとの特色や密教の様態が論じられてはきたが、それを時代的に整理したり、經典作者らがいかなる意図のもとに密教經典を制作したかの問題はなおざりにされ、展開の過程までは言及されてこなかった。本研究では、それら先行研究における不備を補い、初期密教の成立過程を時代的に究明するために、初期密教時代をさらに三期に細分割して、各期ごとにおける密教展開の詳細な動向を究明し、三区分をしたそれぞれの時代的特徴を考察しようとした所に、新しさ、独自性を認めることができよう。

また本論文では、背景文献に可能な限りアクセスし、比較対照するといった実証的な論究態度をとっており、仏教関連のサンスクリット語文献・チベット語文献・漢訳文献はもちろんのこと、パーリ語文献やヴェーダ文献をも扱い、第一期の初期密教經典が成立するに至る背景となった文献を、できる限り実際に引用し、比較対照して、その典拠を示している。これは初期密教に小乗・大乘・ヒンドゥー教といった複数の成立基盤を想定し、複合的な成立基盤のもとに形成されたものと見ていることによる。従来の先行研究には、初期密教の成立基盤を小乗とか、大乘とか、ヒンドゥー教など、一つに限定した過失が見られたとし、これはある時代のいくつかの經典に限定するならば、有効な結論となろうが、初期密教の經典は非常に多く存在するのが実情であり、いくつかの經典、ある時代の密教形態に固執してしまうと、初期密教の全体像が浮かんでこないとし、時代とともに流動的に小乗の側からも、大乘の側からも、そしてヒンドゥー社会の影響力のもとに、仏教教団内で、次第に形成展開していったとみるべきであった、と主張する。

このようにヒンドゥー教の影響とともに、小乗や大乘の中に、密教成立の複合的な基盤を見出したことは新たな見解といえよう。

ただし初期密教の時代的三区分については、研究者によっては異論の出るところであろう。第三期の最終に位置づけられる『金剛手灌頂タントラ』は、著者の研究によれば『華嚴経』「入法界品」を思想的に取り込んで成立していることが指摘されているが、これは極めて重要な指摘であり、次の『大日経』の先駆であるのみならず、初会『金剛頂経』の成立にも拘わる問題を提起している。このような経典を初期密教に分類するのではなく、中期密教の初期に位置づけることが、著者のこれまでの主張に合致するものではないだろうか。その点、初期密教の終末と中期密教との区分の問題に曖昧さが残るように思われる。即ち、第三期最終期の『金剛手灌頂タントラ』を中期密教に組み入れ、それ以前の第二期と第三期中盤期までを合わせて後期とし、第一期を前期とする二区分として捉えることもできるのではないだろうか。どちらにしても、今後は『金剛手灌頂タントラ』から『大日経』・初会『金剛頂経』などへの中期密教の展開の問題に対する解明が期待される。

本研究はこれまでにまとまった研究の無いインドにおける初期密教の成立過程を、時代的に三期に区分して、各時代ごとに製作された諸経典を整理し、その形態の変化していく様相を明らかにしようとしたもので、初期密教の展開史を、時間的な経過を逐いながら、サンスクリット語・パーリ語・漢訳・チベット語訳などの諸資料に直接当たり、実証的に明らかにしようとしている点は、新しい独自の研究として評価される。著者も指摘する通り、初期密教経典の数は膨大であり、本研究の中で扱われなかった経典も多く残っている。しかし主要な初期密教経典について網羅的に論究しており、その点において大村西崖の『密教発達史』以来の体系的な研究として、重要な位置を占めるものとなろう。